

27年度版教科書つれづれ 7 「めだか」(教育出版・小学3年)の巻

加藤 郁夫 (読み研事務局長)

「めだか」は教育出版・小学校3年(上)の説明文である。「めだか」はかなり前からある教材である。23年度版(以下旧版)と27年度版(以下新版)で、一番大きく変わったのは文字の大きさと行間の幅ではないだろうか。

旧版では、本文だけで4ページであったものが、新版では6ページになっている。小学3年生という学年から見ても、旧版はやや文字を詰め過ぎの感があった。われわれ大人でもそうだが、あまりぎっしりと文字が詰まっていると、かえって読む気がなくなってしまうことがある。文字も大きくなり、行間もゆったりとしたことで、子どもたちにとって読みやすくなったといえる。

「めだか」は、小さくて弱そうに見えるめだかが、どのようにして自らを守っているのかを述べた説明文である。はじめに、構成を見ておこう。全体で12段落あり、構成や中身には変化はない。「めだか」は最初に「めだかの学校は 川の中～」という唱歌の歌詞(1番だけ)が紹介されている。この歌詞の部分を私は1段落とみなし、「春になると、小川や池の水面近く～」と始まるところを2段落としている。

前文 1～2段落

本文 3～11段落

本文Ⅰ 3～8段落

本文Ⅱ 9～11段落

後文 12段落

4段落に「では、めだかは、そのようなてきから、どのようにして身を守っているのでしょうか。」という問いはあるが、これに対する答えは8段落までであり、文章全体を支配する問題提示ではない。そうすると、めだかを紹介している2段落までが話題提示、敵から身を守っていることを述べる3～8段落と自然の厳しさに耐えられることを述べている9～11段落が本文になり、12段落でまとめていると読める。

新版で変わったのは9段落である。

旧版では、次のように書かれていた。

めだかは、こうして、てきから身を守っているだけではありません。めだかの体には、自然のきびしさにもたえられる、とくべつな仕組みがそなわっているのです。

本文Ⅰでは、めだかがてきから、どのようにして身を守っているのかということ、箇条書き的に四つ述べている。そこでは主としてめだかの動きや暮らし方を述べている。そして本文Ⅱに入る9段落では、「とくべつな仕組み」があると述べる。

新版は、9段落が次のようになっている。

めだかは、こうして、てきから身を守っているだけではありません。めだかの体は、自然のきび

しきにもたえられるようになっているのです。

おわかりのように、後半の文が変わっている。「とくべつな仕組み」と述べていたのが、「自然のきびしきにもたえられるようになっている」と「とくべつな仕組み」という言葉がなくなっているのである。

なぜ「とくべつな仕組み」をなくしたのだろうか。

10 段落では、「めだかは、四十度近くまでは、水温が上がってもたえられ」ることを述べている。11 段落では「めだかの体は、真水に海水のまざる川口の近くでもたえられる」と述べる。めだかが、水温の上昇や海水がまざっても生きられるのは、そのような仕組みがあるはずである。しかし、10 段落 11 段落では、体がどのようになっているから、水温の上昇に耐えられるのかとか、汽水域でも生きられるのかまでは述べていない。つまり、仕組みにまでは言及していないのである。それゆえ、新版では「とくべつな仕組み」をなくしたのであろう。

文章表現をより厳密にしようとしたものであり、この点では評価できる。

学習の手引きは、基本的なことは変わっていないのだが、「ここが大事」という枠囲みの箇所には違いが見られる。

旧版の「○ここが大事」の見出しは、「『段落』と『要点』」となっており、前半は段落の説明、後半は「要点」に関わって次のように述べている。

段落は、ふつう、いくつかの文が集まってできています。そこで、段落の中の「内容をまとめた文」と「くわしい説明の文」に気をつけて読むと、その段落の「大事な内容」を読みとることができます。この、段落の「大事な内容」のことを「要点」といいます。

新版の「●ここが大事」は「『要点』をつかむ」という見出しで、次のように述べている。

段落の中の中心となる言葉や文は、その段落の「大事な内容」をつかむ手がかりになります。この、「大事な内容」を、「要点」といいます。

新版では、段落の説明を、手引きの脚注に載せていて、「●ここが大事」は「要点」に絞って述べている。それだけ「●ここが大事」がシンプルになったといえる。

しかし、この「要点」の説明には疑問が残る。「要点」は、「段落の中の中心となる言葉や文」を手がかりにつかんだ「大事な内容」だということだ。そもそも「中心」とはどうやって見つけるのか。なにをもって「中心」といえるのだろうか。「中心」の曖昧さは、私たち読み研がこれまでも一貫して批判してきたことである。

確かに「中心」という言い方を授業ですると、ある程度の子もたちは何となくわかる。そして、教師が意図した箇所を答えとして出してくる。だから教師も「中心」という言い方に甘えてしまう。しかし、「中心」では分からない子どもはどうなるのだろうか。どうやって「中心」を見つけたらいいのか戸惑ってしまう子どもに、どう説明するのだろうか。何よりも「中心」の見つけ方は、どうやって教えたらいのだろうか。

私たちの授業は、国語が苦手な子どもたちにも、わかりやすいものでなくてはならない。直感的な理解に頼るのではなく、用語や定義、さらには読み方をきちんと子どもたちにわかりやすく説明できるものでなければならない。

この点に関しては、旧版の説明の方がマシだったといえる。旧版は先に示したが、次のように述

べていた。

段落の中の「内容をまとめた文」と「くわしい説明の文」に気をつけて読む……

段落の中には、「内容をまとめた文」と「くわしい説明の文」とがあるというのだ。ここまではいい説明をしていた。ただその後、「気をつけて読む」と「要点」が読み取れるというのだが、「気をつけて読む」とは、どのようにすることなのだろうか。「気をつけて」とぼかした言い方をすることで、大事なところを曖昧にしてしまった。ここでは、「要点」は、「内容をまとめた文」に書かれているとすべきであった。

旧版も新版も「要点」＝「大事な内容」と述べている。しかし、「大事」という言葉はもともと曖昧な言葉である。誰にとって大事なのか、何を大事と見るかは、見方によっても変わってくる。大事か大事でないかといった、曖昧な言い方で説明していく限り、国語の授業は子どもたちにとってわかりやすいものとはならないし、だれもが納得できる説明にもなっていない。直感的に「大事」なところをつかめる子どもにはよくても、「大事」にこだわってしまう子どもにとっては、わかりにくく、納得しにくいものでしかないのである。

説明的文章では、そこで何を述べようとしているか（何が述べられるか）をつかむことが肝要である。言い換えれば、文章における問題提示をつかむのである。そして問題提示は、文章の初めのほうで示されるのがふつうである。「めだか」では、文章全体にかかわる問題提示は示されていない。2段落は次のように書かれている。

春になると、小川や池の水面近くに、めだかがすがたをあらわします。めだかは、大変小さな魚です。体長は、大人になっても三、四センチメートルにしかありません。

題名にもあるめだかの説明であり、めだかについてこれから述べるという話題提示になっている。そして4段落で次のように述べている。

では、めだかは、そのようなてきから、どのようにして身を守っているのでしょうか。

問いの形で、めだかのてきからの身の守り方を述べることを示している。この文章の小さな問題提示である。この問題提示をつかむことで、「どのようにして身を守っている」のかを読みとることが「大事」になることがわかるのである。「要点」とはその文章における問題提示と関わっているのだ。言い換えれば、問題提示をきちんとつかめることで、「要点」は見えてくるのである。

「大事な内容」「段落の中の中心となる言葉や文」といった曖昧な説明で済ませるべきではなかった。その意味では、「めだか」の学習の手引きに限っては新版の方がよくなったとは言いがたいのである。